

条件文と非条件文における「ハズ」の反事実的な意味の一考察 — 「スル+はずだった」を中心に—

朴 天弘

要旨

This paper aims to explain the meaning of counter-factual in sentences with ‘HAZU’. Assuming that there are two kinds of ‘HAZU’ which expresses counter-factual meaning, one which is used in conditionals which have counter-factual meanings, and one which is used in non-conditionals with the form ‘HAZUDATTA’ (the past tense form of ‘HAZU’). In general, the past form of ‘HAZU’ cannot directly express the counter-factual meaning without any supporting context. This paper proposes that the past form of ‘HAZU’ can express the counter-factual meaning without any contexts, if and only if the basic form of active verbs modify it and is not used with triggers like ‘TASHIKA’, which is an adverb used to remind a speaker’s memory. It is because the past form of ‘HAZU’ means the past inference of the speaker and the basic form of an active verb means the irrealis-event yet to happen.

キーワード：ハズダッタ, 反事実条件文, 反事実的な意味, 前件, 後件

1. はじめに

日本語の「ハズ」が表わす反事実的な用法には、以下のような条件文の場合と非条件文の場合がある。

- (1) 「ああ、だけど、君の残したシーフードをあとでつまみ食したんだ。エへへへ。
もし毒が入っていたなら、私もやられている [はずだ]。 【TRICK2 : 288】
- (2) 本来は三月に学会が行われる[はずだった]²⁾。
- (3) その時、彼が至急治療の手配をしていなかったら、彼女は死んでいた。

(1-2) では、「ハズ」に前接する命題内容に対して、話し手が現実³⁾の世界における事実と相反する反事実的な意味となっている。(1) では、「毒が入っていなかった (P) → 私はやられていなかった (Q)」という現実に対して、「 $\neg P \rightarrow Q$ ⁴⁾」のことが表れている。

(2) では、「本来、行われる予定だった学会が現実において、(何かの理由で) キャンセ

ルされた」という解釈ができる。確かに(1)と(2)の下線の内容が現実と対立する反事実的な内容となっているとはいえものの、同様に現実と矛盾する反事実的意味を表わしているとは思えない。特に、(3)は(1)と比べて文末に「はずだ」を含んでいないことを除いては、前件の「至急治療の手配をしていない」や後件の「彼女は死んでいた」とも偽であることから、同じ反事実条件文であると言えるだろう。

しかし、(1-2)の「はず」を含む条件文や非条件文の場合、その反事実的な意味や「はず」との関係がいかなるものであるかという疑問が生じる。松田(1994)では、(1)の場合を「反実仮想」の用法として分類し、(2)のような非条件文における用法は、先行研究(三宅1993、松田1994、田村1995)においても「非過去形+過去形」の組み合わせで見られる特徴として取りあげているが、単なる指摘にとどまっており、反実仮想が表すものと「スル+はずダッタ」が表す反事実的な意味の違いなど、詳細までには踏み込んでない。特に、先行研究でも、「はずだった」という過去形式や前接する述語の非過去形をとり、「スル^ル+はずだった」の形としてよく表われることが述べられているが、まず(2')をみてほしい。

- (2') a. 三月に学会が行われる[はずだ]。
- b. 三月に学会が行われる[はずだった]。
- c. 三月に学会が行われた[はずだ]。
- d. 三月に学会が行われた[はずだった]。

(2'a,c)の下線部が表わす「行われる/行われた」は、現実において「行われなかった」という現実との対立を表わすことができず、話し手は「三月に学会が行われる」という命題内容に対して事実であると確信はできないものの、「(これから何もなければ)、予定通りに三月に学会が行われる」や「(何かの根拠などから、発話時より過去の時点において)、学会が行われた」という実現の推測を表わすことになる。では、(2'a,c)から考えると、反事実的な意味を表わすには、「はず」の過去形である「はずだった」が重要であると見られるだろう。しかし、(2'd)では、両方とも過去形をとっているが、「3月に学会が行われた」という記憶を話し手が確かめるような読みとなる。つまり、(2'b)だけが「三月に学会が行われなかった」という反事実的な意味を表わしているのである。特に、(2'b)では「行われるはずだった」を「はずだ」に置き換えたり、「はずだった」を省略したりすると、反事実的な意味を表わすことができなくなる。特に(1)の場合に「はずだ」を省略しても反事実的な解釈に差し支えがないことから、「はず」形式自体に反事実的な意味があるのではないように見られるが、实例を見ると、(2'b)のような「スル+はずだった」の場合には、積極的に関わっていると思われる。

以上のことを踏まえて、本稿では、朴(2010)に基づいて「はず」の用法の中でも、

詳しく論じることができなかつた反事実的な解釈となる場合に注目し、特に「スル+はずだった」を中心に、「反事実条件文」と比べながら、反事実的な意味解釈の違いについて考察していく。その理由としては、条件文の前件・後件の「 $P \rightarrow Q$ 」と同じく、「 Q ハズ」における話し手の推論の裏には、「 $P \rightarrow Q$ 」ということによる大前提 (premise) から導かれるものとして、条件文と同じ性質を持っていると言えるが、実際には反事実的な意味に関わる関与度が違うからである。

本稿の流れとしては、2 章で反事実的な解釈の概観として「ハズ」と反事実条件文の特徴について述べる。3 章では、「ハズ」の反事実的な用法として、条件文における場合であるか否かに 2 分類し、「反事実条件依存型」「前提条件依存型」に分けて考察を行い、その違いについて述べていく。4 章では、まとめをする。

2. 反事実的解釈の概観

2. 1 「ハズ」の特徴について

まず、本稿で考える、「ハズ」の基本的な意味は、朴 (2010) に基づいて簡単に述べておく。その基本的意味とは、「裏づけ (P) から推論して「ハズ」に前接する対象的内容 (Q) に帰結する表現」であると考えられる。その推論とは、ある意味では、演繹的な関数関係ではなく、話し手の経験や社会的な一般性に基づいた相関関係の推論であり、話し手が考える関連の強さから「P なら Q であると、P と Q を結びつける関係にある」と述べることである。そして、それに基づいて確信を持った<推測>、記憶を確かめながらその記憶の内容が正しいと支える<想起>、疑問に抱いたことに対して後にその理由・原因となるものを知り、Q であることは当然であると「 $P \rightarrow Q$ 」を確認する<再認>の用法が出てくるのである。以下、その該当する例を順番に挙げておく。

- (4) a. 彼は今頃家でご飯を食べている [はずだ]。 <推測>
- b. 遅れるなど何度も言った [はずだ]。 <想起>
- c. (友達が授業に欠席をして、そのわけについて疑問に抱いていたところ、彼女を迎えに空港に行ったことを聞いた後) なるほど、授業をさぼる [はずだ]。 <再認>

なお、現実との関わりにおいての何らかのくい違いについては、高橋 (1975) が「はずだ」を<みこみ>と<さとり>という用法に分類して以来、森田 (1980) が「当然の帰結が現状と食い違っている場合」を取り出して分別した。さらに、松田 (1994 : 69-70) では、a. 現実の帰結 (Q) とそれに対応する現実 (q) とがくい違うもの、b. 推論の帰結 (Q) とそれに対応する現実 (q) とはくい違わないが、その後の展開の予測結果や付帯状況 (R) が、現実 (r) とくい違うもの、c. 反実仮想のものとして 3 つに分類している。

以下の (5) の (a-c) がそれぞれ松田 (1994) の分類に該当する。

- (5) a. 近藤勇は力強く木戸を押した。その庭の木戸も大戸もすでに嚴重な鍵が下りている筈であった。だが戸はわけなく開いた。 【松田 1994 : 68 の例から】
- b. 昼前家を出てくる時には、こんなところにいるのが嫌で逃げるように出てきたはずである。それが半日もたたぬうちにまたそこへ戻ろうとしている。 【松田 1994 : 69 の例から】
- c. あなたさえあのような事件をおこさなければ、離婚などということはなかった筈だ。 【松田 1994 : 69 の例から】

(5a) の場合では、「嚴重な鍵が下りている」と判断していたが、現実では「鍵がかかってなかった」という事態を表している。また、(5b) では、「嫌で逃げるように出てきた」が「また戻ろう」とする自分自身に対して疑念を抱いている状況である。しかし、「ハズ」の命題内容となる「嫌で逃げるように出てきた」ことは真であり、松田 (1994) の指摘通りに推論の帰結 (Q) とその後の展開の予測結果や付帯状況 (R) が現実 (r) とく異なるものを出して、反事実的な内容を出しているのではない。

したがって、本稿では、現実「Q」において「-Q」となるような反事実的な意味に焦点を当てることから、(5b) を考察の対象から外し、反実仮想 (本稿でいう反事実条件文) の (5c) と (5a) の中でも「スル+ハズダッタ」の形を中心に考察を行う⁹⁾。そして、「ハズ」という形式が、反事実的な意味を表す文においていかなる役割を果たしているのかを考察していくことにする。

2. 2 反事実条件文の特徴について

本稿では、「反事実条件文とは、実際に起こらなかった事態 (事実) に反することや存在に対するものについて、それを真としてとりあげ、そうする場合、起こり得たかも知れないもう一つの事態についてのべる文である」と称する。

- (6) 一時間以上歩きまわって収穫なし。むりもない。ぼくたち三人のうち誰ひとり、街頭でナンパしたことなんてないし、援助だってやったことない。そんな勇気があればクラスのかわいい子にとっくに声をかけている。 【4TEEN : 27】
- (7) しかし、同棲に踏み切ったことはなかった。行ったり来たりは繰り返したが、あおいがはじめだけはきちんとつけたいと言って一緒に暮らすことには反対したのだ。それは正しい判断だった。同棲をしていたら、もっとぼくは彼女に醜い部分を見せていたかもしれない。 【冷静 : 210】

(6-7) 例の下線の内容では、条件文の前件と後件とも現実ではそうではないことが前提とされている。つまり、(6) の、「勇気がない→クラスのかわいい子に声をかけていない」、(7) の、「同棲していない→もっと醜い部分を彼女に見せていない」ということは話し手にとって既知のことである「-P→-Q」の関係を表している。先行研究では、過去形式や「-テイル」形式のようなテンス・アスペクト形式に焦点を当てて説明を行っている(田窪 1993、工藤 1997 など)。そして、後件には、原則として「だろう」、「はずだ」、「と思う」などの推量の表現がくることが指摘されており、下記の(8)は、反事実条件文と「ハズ」が伴に現れた例である。

- (8) 「ああ、だけど、君の残したシーフードをあとでつまみ食いしたんだ。エヘヘヘ。
もし毒が入っていたなら、私もやられている [はずだ]。 【TRICK2 : 288】

2. 3 調査データ

<表 1> 反事実的な意味を表わす「ハズ」の用例数

「ハズ」の用例 (773 個)				
「はずだ」 593 個 (76.7%)		「はずだった」 180 個 (23.3%)		
条件文	非条件文	条件文	非条件文 (文末)	非条件文 (連体)
49/126 個	0 ⁷⁾ /467 個	22/35 個	40/123 個	21/22 個
計	132 個			

本稿で用いられる用例は、4 冊の単行本から手作業で抽出したものと現代日本語書き言葉コーパス 2008 年度版(独立行政法人国立国語研究所)から抽出したものである。本稿では、「ハズ」の全体用例(773 個)の中、「ハズ」が用いられている反事実的な意味となる文を中心に、さらに、条件文と非条件文と分ける。そして、条件文の「はずだ(49 個)」と「はずだった」の条件文・非条件文を、それぞれ「22 個/61 個」にわけ、総 132 個の用例に絞って考察を行う。

3. 「ハズ」の反事実的用法

3. 1 条件文における用法

まず、2.2 節でも触れたように、反事実条件文における「ハズ」の現れ方としては、「ハズ」の存在に大きく関与しない場合であった。

- (9) 本来なら、父の食事を運ぶことなど、母の仕事だ。いや、そもそも家のなかがうまくいっているならば、父が旅館の方に泊まることなどない [はずだった]。

【現代：理由】

- (10) 残念ながら、真実はそのとおりののだ。もしこんなに夫を愛していなかったら、相手が何をしようとこんなに取り乱したりしない [はずだ]。【現代：北条政子】
- (11) 彼女にとって酷な言葉だということはジェイクにもわかっていたし、ある程度は彼女に同情してもいた。だが、妊娠がわかった時点で彼のところへ来ていれば、こんな苦境に立たされずにすんだ [はずだ]。【現代：眠れぬ】

(9-11) のような場合では、「はず」の「はずだ」「はずだった」の両形式が使われ、下線のところは、現実には「 $\neg P \wedge \neg Q$ 」であることが、話し手によって既知のこととして認識されていると言える。また、前件や後件とも命題内容に対する真偽問題は「偽」として前提されているため、他の概言⁸⁾を表す形式などに置き換えても問題はない。

- (9') 一、父が旅館の方に泊まることなどない {だろう／かもしれない}。
(10') 一、相手が何をしようとこんなにとり乱したりしない {だろう／かもしれない}。
(11') 一、こんな苦境に立たされずにすんだ {だろう／かもしれない}。

このときの「はず」の命題内容は「 $P \rightarrow Q$ 」という推論が条件文の形として言語化されているものであり、その推論は「はず」によって確信を持った判断を表すことになる。それは、「はず」が話し手の一般化された経験、知識などから得られた大前提の中で処理することによって現れる意味である。一方、このような反事実条件文は、前件がなければ、その反事実的な意味は保障できなくなる。次の (12-13) をみてほしい。

- (12) 一緒にいると、ジェイクはいつも将来のことを話したくなった。だからこそ、今の彼女の返事が重要なものに思えるのかもしれない。三年前に事実を知らされていたら、自分がきちんとした行動をとった [はずだ] ということをジェイクは彼女にわかってほしかった。【現代：眠れぬ】
- (13) それで捜査本部は美矢子のアリバイがあると見た。... (省略)。これらを検査本部では確めようとはしなかった。その一つでも確認していれば、美矢子を参考人として捜査本部に呼んで事情を聞くことができた [はずだ]。【現代：特急】

前件がないと、(12) では「行動をとった」ということに対する話し手の〈想起〉や語用論的に聞き手に対する確認要求などの意味になりやすい。また、(13) では「事情を聞くことができた」という話し手の〈推測〉の意味になりやすい。このように、反事実条件文における反事実的な意味には、前件や後件の真理値が関係する。

しかし、条件文の場合では、必ず前件や後件の内容に対する真偽値 (truth value) が必

ず偽である反事実条件文だけがあるのではない。

- (14) 父は、母方の祖父・榎名壮一郎が亡くなれば、莫大な遺産を相続することができる [はずだった]。だが、父はその権利を放棄してまで、母を、姉さんを、そして一僕を捨てた。 【現代：カラっぽ】

(14) では、「母方の祖父・榎名壮一郎が亡くなった」を意味するのではない。これから起こる事態を仮定しており、前件 P は後件の Q が実現するための前提条件を表している。これらの例の特徴は、予定・計画、または、話し手が「P→Q」と一般化した大前提から、推測した内容「Q」が現実において違った場合に使われるが、この場合では「スル+はずだった」の構文的特徴が見られるか、「本当なら／普通なら／本来なら」のような表現がよく現れる。その数を以下の<表 2>に示す。

<表 2> 条件文での「はず」の用例数

条件文（「はずだ」）	条件文（「はずだった」）
9 (18.4%) /49	9 (40.9%) /22

下記 (15-17) では、前件に「本来は／これまでの多味子なら／普段なら」が現れて、一般化された対象に対する属性に基づいて考えると、後件のような事態が実現するのが一般的であるが、現実では「そうではなかった」という内容を表している。

- (15) 「お伺いします」は、謙譲の公式に、謙譲語をあてはめているわけで、二重になってしまう。本来は「午後一時に伺います」でいい [はずだ]。しかし、「お伺いする」は許容されている。 【現代：職場】
- (16) 「気をつけていってらっしゃいませ」多味子が、しんみりした口調で、植原に言っているのを、日美子は聞いて、〈おや?〉と、思った。これまでの多味子なら、夫に言う前に、必ず客の方へ挨拶した [はずだ]。 【現代：天城高原】
- (17) 「誰?」「亜由美よ。ちょっと待ってて」千鶴は玄関に向かいながら、首を傾げる。(南田です、だって? そんな言いかた、いつもの亜由美ならしないはずなのに) たしかに普段なら「あたしだよ」とか「亜由美で一す」とか、そんな言いかたをする [はずだった]。 【現代：紅】

ここで (14-17) の特徴とは、(12-13) とは違って、前件と後件の関係において一方が他方に含まれる関係であるか、予定や計画などの過程として位置づけられている場合であると見えよう。後者の場合は、(14) の場合がこれに属し、「スル+はずだった」の構

文として「はずだった」を省略したり、他の概言を表す形式に置き換えたりすることはできない。また、後件だけでも反事実的な意味を表すことができる。前者の場合は(15-17)がこれに属する。この場合では、「ナラ」構文とともに、「本来、普段」のような一般化された内容やある特定の対象に対する属性などを取りあげることが多く、前件の内容は条件文の形をとって、偽であることを仮定しているよりは「P に関して考えれば、Q である」ことは確かであるという意味を表す。一方、(17)の場合では、「スル+はずだった」の構文をとって、後件だけでも、反事実的な解釈が成立する。

以上、「ハズ」が用いられている反事実的な意味を表す条件文をまとめると、下記の(18)となる。

(18) 「ハズ」を含む条件文における反事実の意味の2つのタイプ

① 「 $\neg P \rightarrow \neg Q$ 」: 「反事実条件依存型」 ② 「 $(P \rightarrow Q) \wedge \neg Q$ 」: 「前提条件依存型」

条件文における「ハズ」の中、反事実的な意味が現れるのは、上記の2つのタイプの場合である。両者とも現実との関わりから相反する内容を意味することには変わりがないが、「反事実条件依存型」とは、条件文の前件・後件とも現実に反する事態を表わしており、それを話し手が関係づけていると言える。一方、「前提条件依存型」とは、「スル+はずだった」の構文や「ナラ」構文でよく見られ、「 $P \rightarrow Q$ 」と推論したものが現実において「 $\neg Q$ 」であることから、「P」は「 $\neg P$ 」ではないことを確認し、他の変数要因が存在することを含意するようになる。

3. 2 非条件文における用法

条件文ではない場合、反事実的な意味が出てくるのは、「はずだ」では見つからず、「スル+はずだった」のみ見られ⁹⁾、3.1 節の(18)の「前提条件依存型」に属する。

(19) ドイツの潜水艦がキール港を出発した二週間あと、日本の潜水艦「伊二九」が、ドイツ占領下のフランス・ロリアン港をでた。この艦にもおなじ機密書類が積みこまれていた。どちらかが秘密の任務を成功させる [はずだった]。が、ドイツ艦は大西洋上で、アメリカの駆逐艦に攻撃されて行方不明、「伊二九」は、シンガポールに着いたものの、バシー海峡でついに撃沈される。 【現代：日本】

(20) 刻が経って、驚いた。(兵庫と小次郎がまだ帰って来ない) 伏見村の骨皮道賢のもとに鞍をとどけたあの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる [はずだった]。 【現代：箱根】

(21) これで貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする [はずだった]。が、現実の生活はそうそううまくはいかない。 【現代：弁護士】

(22) 最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる [はずだった] のですが、計画が進むうちに逸子が設計することになりました。 【現代：建築家】

上記の例において、「ハズ」に前節する述語は「スル」形式で現われる特徴があり、「スル+はずだった」の構文で、計画や予定どおりの事態が実現しなかったことを表わす。この時、「ハズダッタ」を「ハズダ」に置き換えると、計画・予定通りに実現することを推測する未実現の内容となり、反事実的な意味は表わさなくなる。

(19') どちらかが秘密の任務を成功させる [はずだ]。

(20') あの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる [はずだ]。

(21') これで貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする [はずだ]。

(22') 最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる [はずだ]。

このように、反事実的な解釈には「スル+はずだった」の組み合わせが重要となってくるわけだが、「スル+はずだった」においても、記憶を確認するなどの文脈やそれに相応する副詞との共起がある場合には、反事実的な意味がなくなることを指摘しておく。

(23) 幼稚園に通っているというその男の子は、確か千歳にいる津奈子の両親が預かっている[はずだった]。 【現代：三浦】

(23) のように、「タシカ」¹⁰⁾という副詞と共起する場合に明らかになってくるが、「タシカ」を用いることで、その裏付けとなるPの情報源は「記憶」であることを顕わに指し示すことになると同時に、下線の命題内容に対する話し手の内容確認にとどまることになる。下記の(19"-22")を参照されたい。これらは、「タシカ」の副詞と共起する場合であるが、単なる記憶確認の意味になってしまう。

(19") タシカどちらかが秘密の任務を成功させる [はずだった]。

(20") タシカ伏見村の骨皮道賢のもとに鞍をとどけたあの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる [はずだった]。

(21") タシカ、これで貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする [はずだった]。

(22") タシカ最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる [はずだった]。

一方、これらの「スル+はずだった」は、先行研究で「ハズ」の<予定>という用法

として分類されてきたものである（篠崎 1981、奥田 1993、松田 1994、岡部 1998 等）。しかし本稿では、単に決まっている予定や心づもりを表現しているという立場には立たない。なぜなら裏付けとなる「P」は予定や計画などを指していて、そこからそれが実行されるといふ推測が「Q」として現れると考えるからである。(24) をみてほしい。

(24) ジェイソンは今日京都で開かれる学会のため、京都に行くことを A は知っている状況

A : 今日、ジェイソンを駅で見たけど、どこに行くのかな？

B : 今日、ジェイソンは京都に行く[はずだ]よ。

しかし、「今日は京都に行く」という「ハズ」の対象的内容は、話し手が既得情報として持っている情報（予定や計画）そのものではない。もし、既に既得情報としての「予定」をそのまま表現するのであったら、「ハズ」を用いる必要はなく、「今日は京都に行く予定だ」と言えば済むことである。

(24') ((24) と同じ状況)

A : 今日、太郎を駅で見たけど、どこか行くかな？

B : 今日、太郎は京都に行く {予定だ／ことになっている／んだ} よ。

(24') のように、(24) は同じ予定・計画の内容を表しているとしても、予定や計画などの「予定」そのものを述べるものではなく、その「予定」という裏付けから推論して導き出されたものを指し示す。つまり、「今日、太郎は京都に行く」ということは話し手によって推測された未確認の事態として、「予定 (P) という属性から考えると、それが実現される (Q) ことは当然である」という意味を表わしていると言える。そして、その時、予定となっていた未実現の事態を表わすために動詞の「スル」形が用いられ、「はずだった」と伴に非実現の事態を表わすことになる。

一方、このようなタイプの文において、(24) の「はずだ」ではなく、(25) のように「はずだった」になると、意味が少し異なることに注意されたい。(24) から、その「予定」という裏付けからその実現を推測するものを指し示しているとすれば、(25) では、記憶から過去の時点で「P (予定) → Q (実現)」と推測していたことを確かめていく表現に変わる。

(25) 観客をステージに上げての出し物では、いの一に伊良部が名乗り出て、ピエロに遊ばれていた。本当は客席にサクラがいて、身内がやる[はずだった]。はじめピエロは戸惑っていたが、すぐに呼吸が合った。【現代：空中】

(25) では、「(本当は) 身内がやる予定・計画からそのまま実現する」という既得情報に対して、「身内がやる」と推論したのは、「はずだった」によって、今ではなく発話時より過去の段階での推論した内容であることが示されている。この場合の推論は、「はずだ」ではなく「はずだった」になると、予定・計画から実現される事態に対する推測というより、その予定・計画自体を記憶から確かめていくような意味に近い。「はずだった」が記憶から、予定が存在していたという事実と辿っていく働きをするということは、「実現されるみこみがあった」という予定・計画を発話時において確かめることであり、それは話し手の「今」においては実現できなかったことを暗示させることになる。となれば、「スル+はずだった」の反事実的な意味は、発話時から切り放された内容を表わしていて、その現実からの照らし合わせによって派生してくるものであるとも言えるだろう¹¹⁾。そして、そのことは次の (26-27) のような「ハズ」に前接する述語が動詞の「スル」形ではない例からも確認できる。

(26) 二人が天然痘兵器の開発を企てたとして、問題はウイルスだった。どこからウイルスを手に入れたかである。天然痘は地球上から根絶された。ヒトからヒトにしかならない天然痘である。その患者が地球上から一人もいなくなった今、ウイルスも存在しない [はずだった]。 【現代：ジェンナー】

(27) 「よし、進発」李忠は、先頭に立った。片脚を失った時、ほんとうは命を失っている [はずだった]。一度死んだ躰なのだ、と李忠は自分に言い聞かせた。 【現代：水滸伝】

このように、「スル+はずだった」を用いて、「その通りに実現すると推測する」と推論したことを、発話時において確認するということは、反事実的な用法やなんらかの現実とのくい違いを表わしやすくなることは確かであると思われる。過去の時点のことをわざわざ挙げる理由はないからである。

(28) 2600CCのステーション・ワゴンが彼らふたりの足がわり、そしてしばしば住居がわりになる [はずだった] のだが、三月の第三週のはじめに清水が友人に貸し、その友人が事故を起こした。 【現代：メイン】

(29) 鶴尾さんは、歴史研究社との仲介をしてくれて、論文を相手へ渡す [はずだった] のですが…」… (中略)。「は?」「昨夜、東西ホテルで、その論文を紛失してしまったのです」 【現代：イエス】

もし、(28-29) の下線のところが実際に実現されていたならば、「住居がわりになった」「論文を相手に渡した」で済むことである。(28-29) では、波線の「ステーション・ワ

ゴン」「鶴雄さん」が持っている情報から下線の Q に帰結することを表しており、その推論が成り立つのは「ハズ」の過去形により発話時と切り離され、発話時においてそれを確認しようとする意味が生じやすくなる。そして、現実と関わって「一応計画・予定はあったが、そうではなかった」という反事実的なことを表すようになるのである。このように、「スル+はずだった」には、「タシカ」のような副詞やそれに相当する文脈などと共起しない限りでは、反事実的な意味を表わす機能があると考えられる。

以上、「前提条件依存型」の「スル+はずだった」は、「計画・予定というものは、後で実現されるもの」という推論から、それが現実において成立しなかったという反事実的なことを表すようになる。そして、その際に、現実との対応の関係を切り離すか、記憶の確認にとどまらせる機能を担っているのが「タシカ」のようなものである。

3. 3 「前提条件依存型」としての「スル+はずだった」

以上、反事実的な意味と関わって、「ハズ」を含む条件文・非条件文では、2つのタイプが存在するのを確認した。そして、そこで重要となるのが「はずだった」に前接する動詞の「スル」形の組み合わせだった。用例の数においても、非条件文は条件文の場合とは違って「スル+ハズダッタ」の方が多かった。

<表3> 非条件文タイプにおける「スル+ハズダッタ」

「はずだった」180個 (23.3%)			
非条件文 (文末)		非条件文 (連体) ¹²⁾	
40個		21個	
スル形	その他 ¹³⁾	スル	その他
31 (77.5%)	9 (22.5%)	18 (85.7%)	3 (14.3%)

特に、反事実条件文の場合では、「ハズ」が反事実的な意味に直接的に関わっていないことが分かったが、同じく前件が偽である条件文であっても、次の(30)のように「前提条件依存型」に属する「スル+はずだった」の場合は、異なってくる。

(30) 萩尾 被害者は、古川淳美さんというOL、事件が起こらなければ間もなく純白のウエディング・ドレスに身を包んで結婚式をあげる[はずだった]、というのでマスコミが大騒ぎを演じています。 【現代：マンガ】

(30) は前件・後件両方とも、現実では「事件が起こった」「結婚式をあげることはできなかった」ことを表わしていて、後件が実現できなかった「原因・理由」となる「事件

が起きた」に相反することを仮定して、「それがなかったら、予定・計画は後件のようである」ことが表れている。そして、「ハズ」を省略するか、他の概言の形式に置き換えると(30')のように真偽が確定されていない単なる推測の意味となってしまう。

(30') 被害者は、古川淳美さんというOL、事件が起こらなければ間もなく純白のウエディング・ドレスに身を包んで結婚式をあげる {#¹⁴} φ/#だろ／#かもしれない}。

また、次の(31-32)も(30)とは違って、後件のみが偽であるが、同じく「スル+はずだった」という「前提条件依存型」を見せている。したがって、下記の例においても「はずだった」を省略するか、「はずだ」や他の概言の形式に置き換えると真偽が確定されていない単なる推測の意味となりやすくなる。

(31) 「幽霊屋敷」通称「無名屋敷」の中を少し居心地よくして、おれは「新しくあらわれた」一とあちらでは言われている一幸雄君と、二日すごした。食料は一応五日分、五日たったら、また高林家の人がはこんでくれる [はずだった]。しかし、食料を三日分あまし、二日目の夕方、「地震」がおそって来た。 【現代：男】

(32) 部屋は二階である。首都飛機場に出迎えてくれた中国旅行社の小柄なガイドが、係員から手渡された鍵を受け取り、二階のその部屋へ案内してくれたら、それで旅行社とは縁切れになる [はずだった]。 【現代：北京】

(31-32)では、前件と後件とも予定・計画の内容の中に含まれていて、(30)とは、前件・後件の真理値においても違いが見られる。

ここまで、条件文でも非条件文でも、「スル+はずだった」は、「前提条件依存型」として「ハズ」の過去形式、動詞の「スル」形など、両方の組み合わせが必要となり、反事実的な意味の解釈を引き起こす機能を持っていることを示してきた。そして、「スル+はずだった」は、反事実条件文のように同じく前件が偽である条件文においても、違う働きをすることが分かった。下記の(33-34)の文全体が表わすのは、現実と相反する反事実的な意味である。しかし、(33)の反事実条件文の場合では、「はずだ」の前に前接する内容(色づけ)は「 $\neg P \rightarrow Q$ 」という反事実的意味を表していて、「はずだ」はその内容に対する確信の度合いを表わすだけである。それに対して、(34)のような場合では、「ハズ」が文全体の反事実的な意味に深く関与していて、省略できない。

(33) 彼女にとって酷な言葉だということはジェイクにもわかっていたし、ある程度は彼女に同情してもいた。だが、妊娠がわかった時点で彼のところへ来ていれば、こんな苦境に立たされずにすんだ [はずだ]。 【再掲：(11)】

- (34) 松井より年上の清原、江藤智を除くレギュラーは、五輪代表か五輪代表候補だった選手だ。仁志敏久は五輪直前に入団したが、入団しなければ五輪代表の主将を務める[はずだった]。【現代：球場】

(34) では、波線の接続助詞「が」により「入団しない」という前件内容は反事実的な意味として保証されるが、やはり「はずだった」に前接する動詞が過去形とならない限り、「はずだった」がなければ「五輪代表の主将を務める」という未実現のこのの意味となってしまう、不自然となる。これは、「スル+はずだった」が文の反事実的な意味に深く関わっていることを意味する。さらに、「 $P \rightarrow Q$ 」であったものが現実において、「 $(P \rightarrow Q) \wedge \neg Q$ 」と実現しなかったことを推論することから「 $\neg P$ 」が導かれるが、「 P (予定、性質等)」が「 $\neg P$ 」であることがないため、他の変数要因が存在することも含意することになる。また、下線の内容は、「はず」の「予定 (P) \rightarrow 実現 (Q)」という推論から、「はずだった」になることによって発話時点との切り離しが起こり、それを確認することから反事実的な意味が生じやすくなるのではないと思われる。つまり、「前提条件依存型」の「スル+はずだった」とは、 Q の非実現の事態を表わすと同時に変数要因の存在まで含意する機能が主眼ではないかと思われる。以上のことをまとめると、次のようになる。

- (35) 反事実的な意味を表わす「ハズ」の文

- 条件文：「反事実条件依存型 ($\neg P \rightarrow Q$)」 \rightarrow 反事実条件文
「前提条件依存型 ($(P \rightarrow Q) \wedge \neg Q$)」 \rightarrow 「スル+はずだった」
「ナラ」構文
- 非条件文：「前提条件依存型 ($(P \rightarrow Q) \wedge \neg Q$)」 \rightarrow 「スル+はずだった」

4. おわりに

本稿では、「ハズ」における反事実的な用法を中心に、条件文と非条件文に分けて考察し、両方とも現実との関わりから生じる意味であることには変わりがないが、それぞれ「ハズ」が担っている機能が違うことが分かった。反事実条件文で見られる「反事実条件依存型」では、「ハズ」は反事実的な意味と直接的な関わりがなく、「ハズ」が持つ「(話し手の一般化された経験、知識から)「 $P \rightarrow Q$ 」であるのは当然である」という意味から、反事実的な内容に対する話し手の単なる確信的な判断を表わすのみである。

しかし、条件文でも非条件文でも、「スル+はずだった」の「前提条件依存型」では、「ハズ」が深く関与することになる。その時、予定・計画、または、ある対象が持つ属性などから推論できる予想や過程という前提条件から「はずだ」による推論が行われ、条件文においては、その過程の一部が前件として言語化される。そして、「はずだった」に

なることによって、発話時とその前提条件（「予定（習慣）」「性質」）から「Q」という推論を切り離し、発話時では前提条件「（これから）それが実現する」ということを確認するにとどまり、確認済みの前提条件を「はずだった」を用いて確認することは、ある意味では、当該の推論で用いられる推論の前提が実現しなかったことを表わすようになる。つまり、話し手によって一般化された前提を保留し、もう一度、「ハズ」を用いて「P→Q」であると推論をかけることにより、話し手にとって「Q」であることが当然だったが、何かの変数要因により実現されなかったことを表わす機能を果たしていると思われる。また、「タシカ」などの表現と共起する場合には、単なる記憶の確認にとどまって、現実との関わりから切り離され、＜想起＞などを表わす意味となる。

以上、本稿では、「スル+はずだった」を中心に条件文と非条件文について考察し、「スル+はずだった」の場合は、条件文でも反事実的な意味を表わすに深く関与していることを明らかにしたが、同じく確信を表わす「ニチガイナイ」のような形式との違いについては、触れていない。これに関しては、今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿で使う「ハズ」とは、テンス形式と絡み合い「はずだ」や「はずだった」の両方を示す。
- 2) 本稿で使う用例は、書籍やコーパスから集めたものであり、用例の番号付や傍線などは筆者によるものである。また、出典がないかぎり筆者の作例であって、同時に日本人からネイティブチェックも受けているものである。
- 3) 本稿で使う「現実」とは、「話し手が事実として認識している世界」を意味する。
- 4) 「-P」とは「P」と相反する関係を表わして、「Pでありながら、-Pである」とは、お互いは「相互矛盾関係」を表わす。本稿では、「(P) →Qハズ」と「ハズ」に前節するのが「Q」であると考える。
- 5) 工藤（1995）から用語を借り、「スル」は動詞述語の非過去形「ル」形、「非テイル」形として使う（例、行く、食べる）。
- 6) (5a) の場合では、文脈的に依存する傾向があると思われるからである。つまり、「鍵がかかっていない (-Q)」から「鍵がかかっている (Q)」と判断する「反事実的な意味」ではなく、話し手が「Q」であると判断していたことが、後の時点で「-Q」であったことを表しているからである。(5b) の場合は、「ハズ」の命題的内容「Q」と現実「-Q」との対立を表わすものではない。この場合の「ハズ」の用法とは、「Qを確認していたと思っていたことに対して、その真偽を保留し、更に記憶から確かめる」場合であって、特に下記のように語用論的な条件が揃うと、聞き手に対する「確認要求」の意味合いも出てくる。「その話は、もう何度も断つた[はずだ]よ。あたしはまだ誰とも結婚する気なんかないんだ」【探偵：141】
- 7) <注6>のような例が「37個/467個」あったが、本稿では考察の対象としないがゆえに、取り扱わない。

- 8) 寺村 (1986) の用語を引用。しかし、寺村では、「ハズダ」を説明のムードを表わす形式として分類している。が、本稿では話し手の未確認領域や不十分とされる事態へ対する話し手の推論による判断を表わす点から、概言の形式としてみなす。
- 9) ここには、(5c) のような反事実的な意味よりは、現実との何らかの食い違いがある用法がほとんどであった(「(ここにボールペンを置いた記憶があるが、ボールペンが見つからないとき)ここに置いたはずだ」「もう質問するなど言ったはずだ」)。
- 10) 仁田 (2000 : 107) では、「タシカは、記憶を呼び起こし、記憶の中に蓄えられた情報を探す」といった意味合いを持った副詞である。この副詞が共起する文に出現する判定のモダリティは、(中略)、確言であって、「ダロウ」や「カモシレナイ」「ニチガイナイ」や「ラシイ」などの概言系は現れない。」と述べている。
- 11) 高梨 (2004 : 46-47) では、「はずだった」の場合、<反事実>と解釈されるのは語用論的によるものであるに対して、「べきだった」の場合は、<話し手の発話時の評価>を表わすことから文脈によらず、第一義的に<反事実>の意味になると述べている。一方、田村 (1995 : 51) では、「ハズダッタ」の判断や根拠の有効性が継続するか否かによって「反事実」と「確認」として機能すると述べている。
- 12) 以下の例などが、これに属するが、文末のものとはさほど変わらなかった。
例) 僕の弟か妹になる [はずだった] 小さな命も、結局その世に誕生しないまま、天国へと旅立ってしまった。【現代：漆黒の薔薇】
- 13) これには、形容詞などの状態述語や動詞述語の「テイル」形が属している。
- 14) 「#」は、非文ではないが、元の意味から変わっていることを表わす。他の概言の形式では、「結婚式を挙げる」ということに対してこれからの実現可能性を表わすに対して、無標形式の場合では、「事故が起こらなければ、結婚式を挙げる」という一回の事態よりひとつの抽象化した一般的な事態を表わすようになる。

参考文献

- 岡部嘉幸 (1998) 「ハズダの用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 pp.947-960 汲古書院
- 奥田靖雄 (1993) 「説明(その3) -はずだ-」『ことばの科学6』 pp.179-215 言語学研究会
- 工藤 浩・仁田義雄・森田卓郎 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』 岩波書店
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 工藤真由美 (1997) 「反事実性をめぐって」『横浜国立大学人文紀要第2類語学・文学』44 pp.51-65 横浜国立大学
- 篠崎一郎 (1981) 「「はず」の意味について」『日本語教育』44 pp.43-56 日本語教育学会
- 高梨信乃 (2004) 「評価のモダリティ形式のタ形について-「べきだった」「なくてはいけなかった」

- 「ざるをえなかった-」『日本語文法』4-1 pp.38-54 くろしお出版
- 高橋太郎 (1975) 「「はずがない」と「はずじゃない」 『言語生活』289 筑摩書房
- 田窪行則 (1993) 「談話管理理論から見た日本語の反事実的条件文」 益岡隆志編 『日本語条件表現』 pp.169-183 くろしお出版
- 田村直子 (1995) 「ハズダの意味と用法」『日本語と日本文学』21 pp.43-53 筑波大学国語国文学会
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 第6章 pp.265-290 くろしお出版
- 朴 天弘 (2010) 『現代日本語における推論形式「ハズ」の一考察-「未確認型」「確認保留型」「確認型」を中心に-』 東京大学大学院修士論文
- 松田礼子 (1994) 「『はずだ』に関する一考察-推論による観念の世界と、その外に実在する現実の世界をめぐる-」『武蔵大学人文会雑誌』26-1 pp.53-89 武蔵大学
- 三宅知宏 (1993) 「認知的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61 pp.36-46 大阪大学国語国文学会
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』 pp.409-412 角川書店

◆調査したデータの出典

- ・現代日本語書き言葉コーパス 2008 年度版 (独立行政法人国語国語研究所)
- (以下、便宜上、『現代：作品名』と示し、() は略名を表わす)
- (漆黒の薔薇)『漆黒の薔薇にくちづけを』 / (イエス)『イエス・キリストの謎』 / (男)『男を探せ』 / (カラっぽ)『カラっぽの僕に、君はうたう』 / (北条政子)『北条政子』 / (球場)『球場に数秒間の沈黙を』 / (空中)『空中ブランコ』 / (紅)『紅の悲劇』 / (建築家)『建築家長谷川逸子』 / (ジェンナー)『ジェンナーの遺言』 / (職場)『困ってませんか？職場の言葉』 / (水滸伝)『水滸伝』 / (天城高原)『天城高原殺人迷路』 / (特急)『特急「富士」「はやぶさ」殺人交差』 / (日本)『日本列島を往く』 / (眠れぬ)『眠れぬ花嫁』 / (箱根)『箱根の坂』 / (北京)『北京の貝殻』 / (弁護士)『弁護士む〜みんの解決！女の一大事』 / (マンガ)『マンガからはいる法学入門』 / (三浦)『三浦綾子全集』 / (メイン)『メイン・テーマ』 / (理由)『理由』
- ・単行本 () は略名を表わす)
- (探偵)『探偵ガリレオ』東野圭吾 文藝春秋 2008 年 / (TRICK2)『TRICK2』蒔田光治、太田愛福田卓郎 監修：堤幸彦 角川文庫 2002 年 / (4TEEN)『4TEEN』石田衣良 新潮文庫 2005 年 / (冷静)『冷静と情熱のあいだ Blu』辻仁成 角川文庫 2003 年